

井戸が無い家のこと

今坂柳二 採話

わしはヒマがあるから、ちよつとの時間があんと近所を歩く。まあ、あんまりかせぎもとは言えん。何をしに行くかちよつとな、昔話のネタをめつけに行くんじやよ。今日の話もそのうちの一つなんだけど、昔話って本当に面白いんだよ。どうしてどうして、今日日きょうびの話なんぞより、よっぽど面白いんだよなあ。

よかつたら、ちよっくら寄ってけや、なあ。そうと決まれば、ちよつど這入はいったお茶があるよ。狭山のことだい、上物があらあ。

おらがは、知つての通り、笹井の柳澤だいな。裏手はハケになつちよつて、そこから先は、赤土帯、先住民族の住居が出てくる。三千年も昔から人間が住みついてた処、つまり縄文遺跡だ。

おい、皆が！おるかい。縄文の空気はいいな。生き返るような気がするぜ、なんて声をかけてみたくなるさ。

井戸がない家、今で言う水道がない家のことさ。そんなのあるはずがない。誰だつてそう思う。水がなくちゃあ、たらしもちも食えねえ。そこで近所の若い衆らが、何処から水を取っているのかと、井戸のない家の裏のハケを掘ってみたんだよ。ハケの下の様子を覗き見しようちよつうけさ。

「おいおい、大丈夫かい。それ、ハケの土が崩れるんでねえかい。」

「おらが方は、蚊がぶんぶんやってくるじゃあねえかい。」

「ありやりや、ハケの土が団子になって転がりだしたよ。」

「せつかく意気込んでやって来たちよつに、やつぱり水の出口が見定められねえん。」

やつぱり分からん。さつぱりとも分からん。右から見たつて左からすかしたつて、近所の若い衆の誰にも分らん。

そこへ帰ってきたのは、この家のご主人。

「これこれ皆の衆、何をいたしておるんじやあ。なにに。水が無い？水が無いところで、どうしていもを蒸かすんかちよつのか。ふくん、そのことか。知りたいなら教えましようよ。ま、そこへ腰を下ろしなされ。」

いいですか、ここに転げた石ころ、へんてつもない川原石、何千年もの昔むかし名栗山から流れ着いたものじや。わたしのうら庭に転がっておつたので、使わせていただいておりますものじや。

あそこに水口があるじやろ。あそこへこの石を当てがっておきますならば、水はピタリンコはまりサジ一杯の水も通しません。外しておけば石垣にパタリンコとばかりはまり込んで、水はサラサラと流れ出てまいります。

さて、皆さん、こんな次第でござんすが、いかがでござりましよう。」

さあてさて、世にも不思議な物語、お気にいりされましたでしょうか。では、また。

お話の主人公はこの方 権大僧僧都法師柳全臺 明治十一年一月二日 佐々木坊太郎

いまさか りゅうじ

狭山市笹井在住。二十四歳から俳句に関わって、現在同人誌「つばさ」代表。かたわら、昔ばなしの採集・採話を続け、「龍じいの昔ばなし」以下十冊発行。

編集後記

令和2年となりました。本年も文団連の会報として明るい読み易い紙面を心掛けて参ります。

オリンピックの年、狭山市では7月に聖火リレーのイベントと青少年文化体験フェスタ[7月4日(土) 予定]とかち合うのか心配したがどうやら大丈夫の様子、子供達の為にも実施したいもの。

芸術祭も間近、私も「世代を超えて」に民謡で出演します。桜まつりも出ますので、昨年のような満開の中での舞台になると良いですね。

(高沢正夫)